

【ねがいましては】

平成27年10月26日

KYOWA SCHOOL

第300号

「高学歴なニート」

ある日の新聞、10cm四方くらいの記事が載っていました。OECDが発表したものなのですが、日本の若年無業者（ニート）は、他国に比べて成績が良いという結果が出たとのことです。その結果、OECDとしては、「学校から仕事へと円滑につながる仕組み作りが必要である。」と、指摘しているそうです。

そこからわかること、勉強（成績）第一主義の教育環境は、結果的に社会への順応を妨げてしまうことになる。今の学校教育は、社会への橋渡しになるような子どもの育成からかけ離れている。これは、小学校入学時から大学卒業までの長期にわたる人間形成のあり方に歪みが生じているかもしれないということになります。

それとも今の社会そのものに大きな歪みが生じていることが、ニート発生の要因になっているのか？ 疑問は尽きません。

ただ、以前の【ねがいましては】でも紹介しましたが、東京大学が1年生の学生を対象に、1年休学しながら様々な環境の中で社会体験をしていくという仕組みを始めたことは、このOECDの発表とは無縁とはいえないと思います。

すでに、かなり以前から、大学側ではこれではいけないという危機感を感じていたと思われます。

そのような一部の大学の動きの中であって、小・中・高校の中では、あまり際だった変化は感じられません。相変わらずの成績偏重は根強くあると思われます。国家が定める教育の中では、一斉に大きな変化はなかなかできるものではないことも当然です。国定教科書もそのひとつでしょう。相変わらずの就職＝高学歴といった見方は、保護者の方々の間では当たり前なのかもしれません。現に、「あそこのお子さん、東大合格なさったらしいわよ。」と聞けば、かなりの方が羨望のまなざしを浮かべると思います。そのお子さんがどのようなコミュニケーションをなさる方なのかは想像されないでしょう。きっと何もかも、ずば抜けているとお感じになってしまうはずですが。礼節はしっかり身につけているはずだ……。問題はここです。

「ひと」……。人は人と触れ合って初めて人になる。

家族の会話が絶えない明るい家庭で成長するお子さん。家族に対する思いやりは、当然のように身につきます。やがて学校生活では多くの友だちから慕われ、誰とでも笑顔で接することのできる、気配りのできる「ひと」へと成長します。もちろん、学力の面でも目立ちはしませんが、そこそこの所にいるはずですが。それどころか、ご家族やお友だち、学校の先生方から温かい声援を戴きながら勉学に勤しみ、見事に希望大学へ合格するかもしれません。当たり前です。多くの思いやりの中で育ったお子さんが、「勉強なんか嫌いだー」と言って乱れることは考えられないからです。

一方、目が覚めてから寝るまで、教育熱心なご両親にみっちり勉強指導されながら成長するお子さん。常にご両親に対して「信頼」というひとつの課題と対話しながらの毎日です。「僕は、親から信頼されているのだろうか。」「私は、親の期待に応えられているのだろうか。」「今度、成績が悪かったら何いわれるか……。」「不安な日々が続きます。次第に人と接することが少なくなり、人から受ける想いを深く感じ取ることもせず成長します。当然ながら、自ら想いを他人に渡すことも知らない「ひと」へと成長します。やがて勝ち取った国立大学合格。

このような表現が非常に偏ったものであることは重々承知ですが、人と接することの重要性が今の教育の中ではきわめて少ないのではないかと思います。家を出、帰宅するまで、全く声を発することなく生活できてしまう場でもあるからです。かといって教育の現場で指導者が強制的に発言をさせるようなことをしても、おそらくかたくなに拒んでしまうことは想像できます。

壁で閉ざされた部屋……。学校。教員という大人と、子どもたちとの触れあい。ちまたに飛び交う「不審者」という単語。先生という大人以外は不審者……。これでは高学歴なニートが誕生してもおかしくありません。

学校という場所……。助け合いの場所。家族という場所……。助け合う場所。人と人が触れ合う場所……。助け合う場所。それが当たり前であるという環境作りが私たち大人の責務ではないでしょうか。

私の小学校時代、世間は交通戦争という語彙が誕生する凄まじい車社会の到来を迎えていました。登校は集団登校。6年生が先頭に立ち、その後ろは1年生から順番に最後列は6年生といった一列縦隊編成での登校でした。学校が近づくにつれ、あちらからもこちらからも登校の列が現れます。列は一本の麺のようになりながら、学校へと吸い込まれていきます。1年生は6年生を羨望のまなざしで眺めます。6年生はそのまなざしに答えるべく、下級生たちに気配りをします。「ほら、列からはなれないで……。」「などと声をかけます。

ほんの一場面なのですが、人と人が支え合う瞬間です。その列を笑顔で迎えてくれるみどりのおばさん……。僕たちの暮らす町はまんざらでもないぞ……。言葉では表現できなくても、子どもたちはそれぞれ安心したものを手にしていました。

人と接しなければいじめられることもない。人と接しなければ叱られることもない。机に向かっているだけで、親は何も言わない。それどころか暖かい眼差しを送ってくれる。でも、会話は……。

さてみんな、今日も冗談混ざりで楽しく勉強しましょう。触れあいを楽しみましょう。ありがとね。